

「ミツカン水の文化フォーラム 2019」を開催しました

江戸東京からの学び
廻船が運んだモノと文化とは

シンポジウム

日時 2019年10月19日(土) 13:00 ~ 17:00
会場 立教大学 池袋キャンパス
来場者数 90名



講演1 齋藤善之さん

江戸後期の市場を支えた船・商人・港

講演2 小泉和子さん

桶樽が支えた江戸時代

パネルディスカッション

ファシリテーター 木村直也さん パネラー 齋藤善之さん 小泉和子さん

江戸東京から学ぶ、
持続可能な社会・暮らしに引き継ぎたい知恵

2020年を目前に控え、世界から注目を集める「江戸東京」。かつては運河や堀が網目のように張り巡らされた水の都であり、廻船が全国から運び込んだモノが100万人以上の人々の暮らしを支え、特有の文化を開花させました。

また、舟運には欠かせない道具「桶樽」は、江戸時代に爆発的に普及し、生産と暮らしのあらゆる分野で活用されました。

優れた循環型社会であったといわれる江戸の「知恵」は、その文化や暮らしを支えた流通や道具のなかに、どのように息づいていたのでしょうか？そして、その「知恵」から現代社会が学ぶべき点はあるのでしょうか？

「ミツカン水の文化フォーラム 2019」では、「江戸東京からの学び 廻船が運んだモノと文化とは」と題して、「水とのつきあい方」を絡めながら、持続可能な社会・暮らしに引き継ぐべき「江戸の知恵」を探りました。

当日の講演、パネルディスカッションの抄録は、当センターのホームページで公開予定です。ぜひご覧ください。



齋藤善之さん
東北学院大学
経営学部 教授



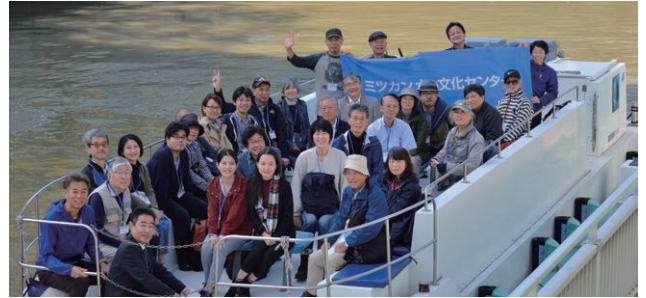
小泉和子さん
家具道具室内史学会
会長



木村直也さん
立教大学 文学部
特任教授

クルーズ

日時 2019年10月26日(土) 8:00 ~ 12:00
エリア 佃・日本橋川・小名木川エリア
参加者数 24名



シンポジウムで学んだ情報をクルーズで体感

「ミツカン水の文化フォーラム 2019」では、シンポジウムとは別日程でクルーズ企画も実施しました。シンポジウム参加希望者のうち、クルーズへの参加も希望される方の中から抽選で20余名を選出。実際に船に乗り、江戸市中に物資を船で運び込んだ運河や掘割などの跡をたどることで、シンポジウムの内容を体感していただきました。ナビゲーターは東北学院大学教授の齋藤善之さんにお願ひし、一般社団法人 まちふね みらい塾 専務理事の阿部彰さんにも解説していただきました。



阿部 彰さん
一般社団法人
まちふね みらい塾
専務理事

絵図を用いて船上で解説する
齋藤善之さん

機関誌「水の文化」62号に関する訂正とお詫び

『水の文化』62号の記事について誤記がありましたので、お知らせいたします。

p5 目次内の写真説明文

- 誤 東京の東部を流れる荒川と、荒川の左岸から合流する中川（提供：葛飾区）
正 東京の東部を流れる中川と新中川の分岐点（提供：葛飾区）

p10 図1のタイトル

- 誤 平成30年7月豪雨（西日本豪雨）48時間降水量の期間最大値の分布図
正 平成30年7月豪雨（西日本豪雨）期間降水量の分布図（6月28日0時～7月8日24時）

p10本文1段落目10～11行目

- 誤 48時間降水量の期間最大値
正 6月28日0時から7月8日24時の期間雨量

p10本文2段落目8行目

- 誤 48時間降水量を見ると、
正 同期雨量は

すでにお手元に届いている読者の皆さまに訂正してお詫びいたします。

水の文化 Information

■「水の文化」に関する情報をお寄せください

本誌「水の文化」では、今後も引き続き「人と水のかかわり」に焦点をあてた活動や調査・研究などを紹介していきます。

ユニークな水の文化楽習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根ざした調査や研究がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

■ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください。

<http://www.mizu.gr.jp/>

■水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページからPDFファイルとしてダウンロードできるほか、冊子をご希望の方はホームページの「最新号のお申し込みボタン」からお申し込みいただけます。どうぞご利用ください。

■「水にかかわる生活意識調査」ホームページで公開中

20年以上にわたり、ほぼ同じ内容で日常生活と水とのかかわりや意識、水と文化に関する生活意識調査を実施しています。結果はすべて公開していますので、ぜひご利用ください。

皆さまの感想を お待ちしております！

『水の文化』63号について、アンケートにご協力ください。
今後の機関誌をよりよくしていくための参考にさせていただきます。

◆アンケートへの回答はこちらから。

<http://www.mizu.gr.jp/form63.html>



※アンケート用紙をお持ちの方は、FAXまたはメールにて
下記へご返信いただく形でも結構です。

FAX：03-3568-4025

メールアドレス：mizubun@mizu.gr.jp

編集後記

この度の度重なる災害により被害を受けられました皆さまに
謹んでお見舞い申し上げます。水は我々に恵みと災いの両方
をもたらしてくれていると思います。今号は、水との関わり
が深い桶・樽の役割の変遷から学べるものがあるのではと始
めた企画でしたが、先人の知恵と共に、これに携わる方々の
時を経ることへの思いから「縁を結ぶ」という気づき（恵み）
をいただけたように感じています。（五）

桶樽全盛期のことを知るにつけ、「藍」取材時にも学んだ循環
型社会江戸の徹底ぶりに驚かされた。修理して使い続け、最後
は燃料として使い倒す。モノを消費するのではなく使い続ける
前提で考えると、自ずと知恵や工夫がわいてくるのだろう。ひ
たすら消費することに慣れ切った自分の生活の中で、まずは何
か1つ「使い倒す」経験を積んでみたいと興味をわいてきた。
（松）

身近な桶を探してみたところ、我が家にひとつ飯台がありま
した。毎年、桃の節句でちらし寿司を作るときに登場しま
す。年に一度しか登場しませんが、何十年も我が家で大切にされ
てきました。編集会議の際に「時間の経過とともに価値が増
す」という言葉が出てきました。私にとって飯台という木桶
を持ち続けた時間の経過の分、家族との思い出が増えて価値
が増していると感じています。（飯）

私の書齋には15年以上使っている木の椅子がある。この椅子
は、ほとんどの部材が機械加工で、どうしても機械では加工
できない細部に手仕事の技が使われている。発売から70年近
く経つロングセラー商品だが、かつては多くの工程を職人技
に頼っていた。購入時は白木だったこの椅子は、良い具合に
色が変わってきた。汚れも傷も、長い時間を過ごした自分の
歴史。そのような経年変化も自然素材の魅力のひとつだ。（力）

人は皆、性格が違うし癖も異なる。ところが木桶もそうらしい。
人によく見られる場所の木桶はもろみがほとんどなくなるけ
れど、隅っこの木桶はそれに及ばない——そんな話をヤマロク
醬油で聞いた。なるべく目を向けて、ときには声をかけると変
わっていくそうだ。物言わぬ木桶にも個性があると知って不
思議だったが、それは子育てや後進の指導と同じことだと、心を
新たにした。（前）

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化 第63号

ホームページアドレス

<http://www.mizu.gr.jp/>

発行

ミツカン水の文化センター

〒104-0033 東京都中央区新川 1-22-15 茅場町中埜ビル

株式会社 Mizkan Partners

Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578

発行日

2019年（令和元年）11月

企画協力（氏名50音順）

沖 大幹 東京大学未来ビジョン研究センター教授

古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会

陣内秀信 法政大学名誉教授

鳥越皓之 大手前大学学長

中庭光彦 多摩大学教授

制作

浦本五郎

松本裕佳

小林夕夏

久保悦史

飯野真奈実

編集製作

前川太一郎 編集

中野公力 デザイン・撮影

蔵田 豊 デザイン

執筆

秋山健一郎 (pp.22-25)

佐々木 聖 (pp.10-17, pp.26-27)

手塚ひとみ (pp.18-21)

前川太一郎 (pp.6-9, p.28, pp.36-44, p.49)

撮影

大平正美 (p.6, p.28)

葛西亜理沙 (p.9, p.26, pp.36-44)

川本聖哉 (pp.4-5, pp.10-13, pp.18-21)

鈴木拓也 (pp.14-17, pp.22-25)

中野公力 (pp.45-49)

藤牧徹也 (pp.32-35)

印刷

中埜総合印刷株式会社

※禁無断転載複製写転充